

ドメスティック・バイオレンス被害を受けた母親と子どもの回復を促すプログラムの効果と支援の検討

藤田景子(金沢大学医薬保健研究域)

高田昌代(神戸市看護大学)

高島周(ののいち産婦人科クリニック)

<要 旨>

本研究は、DV 被害者支援を行っている支援者の経験知に基づき「DV 被害を受けた母親と子どもの回復を促すプログラム」を検討・作成し、実施後の受講者の効果と支援ニーズを明確にすることで、より実践で活用可能な DV 被害を受けた母子への早期回復支援の検討を目的とした。DV 被害を受けた母親と子ども対象としたプログラム作成を、常日頃から DV 被害者支援を行っている支援者とともに検討を重ねた。このプログラム受講者である研究参加者は、母親 13 名とその子ども 16 名であった。DV 被害支援者は 4 名で行った。結果、子どもとの関係で難しいことや必要な支援に関する感想は<子どもの落ち着きがない等の DV の影響への心配>や<地域で母子が支えられながらの生活環境への安心感>等が抽出された。またプログラム終了後、母親から<母子間の言葉によるキャッチボールの向上>や<母親が子どもへの接し方を学んだ>こと<自分を認めてくれる場や仲間への安心感により引き出される参加意欲>が抽出された。さらに、支援者からは、プログラムの検討課題として<子ども同士のつながりを作る工夫>、<母子同室と別室のプログラムのバランス>、<開催回数と時期のバランス>が抽出された。DV 被害者の母子には父親との関係や子育ての困難感などがあるが、今回、母子の良好な関係の再構築を促し、子どもへの適切な養育環境を提供するための母親と子どもの安心できる場と信頼できる人といった環境の提供を同時にすることができていたことが明らかになった。このことが、母親と子どもを安定・安心に導き、母子の相互作用により、より良好な母子関係の再形成を促進することにつながったと考えられる。今後、さらなる研究を重ね、より実践可能な DV 被害を受けた母子の早期回復および DV 予防プログラムについて検討していく必要がある。

<キーワード>

ドメスティック・バイオレンス, 女性, 子ども, 回復, 支援

【はじめに】

厚生労働省の発表によると平成 21 年の離婚件数において、子どもがいるカップルは 146,408 件であり、離婚原因としては、「暴力をふるう」30.2%、「精神的に虐待する」25.1%、「生活費を渡さない」22.6%との報告がある¹⁾。「暴力をふるう」や「精神的に虐待する」「生活費を渡さない」はドメスティック・バイオレンス(以下 DV とする)の項目でもあることから、DV 被害を受け離婚した母親の多くは、子

どもを連れていることが分かる。

ここ数年、我が国における DV 被害者である母子への支援の現状は、DV 被害を受けている女性や子どもが多いにも関わらず、具体的な DV 被害を受けた母子への回復支援はまだまだ模索しながら行っている状況である。

そこで、本研究では、DV 被害を受けた母親や子どもの影響を踏まえた母子の回復を促すプログラムを作成・実施し評価を行うこと、及

び DV 被害を受けた母子への効果的な支援方法を明らかにすることを目的とする。

本研究の結果は、DV 被害母子の長期的な影響を軽減し、良好な母子関係を築き、子どもへの適切な養育環境を提供することで、暴力の世代間連鎖²⁾を防ぎ、DV 被害を受けた母子の早期回復に貢献できるという社会的意義があると考えている。

【研究方法】

1. 研究デザイン: ミューチュアルアプローチを生かした DV 被害を受けた母子の回復プログラムの効果評価デザインとする。

2. 調査期間: 2015 年 7 月～2016 年 3 月

3. 研究協力者

1) プログラム参加者: DV 被害を受けた経験があり、現在は、加害者と別居または離婚している母親とその子ども

2) プログラム作成・実施者: DV 被害女性や子どもの支援者

4. 研究枠組み

社会プログラムの評価は、一般に以下の 5 つの領域のうち 1 つ以上のアセスメントを伴うものであり、(1)プログラムのニーズ、(2)プログラムの設計、(3)その実施とサービス提供、(4)そのインパクトあるいはアウトカム、(5)その効率性である³⁾。そのうち本研究では(1)から(4)を実施した。

5. 調査方法

1) プログラム実施: 2015 年 7 月～2016 年 2 月

2) プログラムについて

常日頃 DV 被害母子を支援している支援者の経験を踏まえて、プログラムを作成した。その後、DV 被害を受けた母親のニーズ、DV 被

害母子の支援経験、各回のプログラムの振り返りを踏まえて検討し修正を繰り返した。

3) プログラム概要 (表 1)

表 1. プログラム概要

第1回	7月 ^{*1}	いろんな気持ちを言葉で伝えよう -コミュニケーション、怒りの感情について-
第2回	9月	
第3回	10月	家族について話そう
第4回	11月	安全計画を立てよう -勝たなくていい、ひきわけあり、困った時はどうする?-
第5回	12月	親子でボディーワーク(クリスマス会)
第6回	2月 ^{*2}	自尊心を高めるワーク -だいじなわたし-
※1:1泊2日		
※2:1月予定であったが、天候不良により2月へ延期		

4) プログラムの目的と予測される効果

暴力被害を受けた母親および暴力のある家庭で育った子ども達は、暴力の被害により各々の健康を害し、精神の不調がみられる場合が多く、加害者と離れた後でさえも、回復に時間を要している。暴力の影響により、子どもとの関係で悩む母親の訴えもあり、母子の回復には、まず母子関係の良好な関係作りが必要であると考え。そこで、母子は相互に影響を及ぼしながら生活をしていることから、どちらか一方に回復支援のアプローチをするよりは両者にアプローチすることでの効果が高いと考え、本プログラムは、母親と子どもが別々の部屋で同じ内容のプログラムを受けることとする。母および子どもが同様の内容のプログラムを受ける事で、家に帰り、相互に「今日はどうだった?」といった会話や関わりの変化につなげ、母子相互作用により良好な母子関係の再形成を促進する効果を狙う。

5) データ収集

(1) 今回のプログラム前の参加者の子どもとの日常生活の状況

全てのプログラムの開始前に、DV 被害を受

けた母親（以下母親とする）を対象とし、子どもとの関係性で難しいこと、子どもの特性で難しいこと、必要な支援等について、インタビューガイドを用いたフォーカス・グループインタビューを行った。

(2) プログラムの設計・プロセス評価

検討会議での支援者の言動ややり取りについては、許可を得てフィールドノートに記載した。この時点では、特に、プログラムの目的や意図、工夫、注意点について、支援者の経験知がどのようにプログラムに反映するかを中心にデータ収集を行った。

6) プログラムのアウトカム

(1) 各回のプログラム実施終了時の調査

①母親（プログラム直後）：プログラム内容に関する感想や意見について自己記入式質問紙、およびフォーカス・グループインタビューにて、プログラムの満足度やその他必要な支援について自由回答形式で尋ねた。1回のインタビューは1時間程度とした。

②子ども（プログラム直後）：プログラム内容に関する満足度や理解度について、インタビューガイドを用いた個別インタビューを行った。

③母子（家に帰り1週間～2週間後）：母親を対象に、子どもの言動の変化や態度の変化等について自由記載の自己記入式質問紙を用いて尋ね、郵送法にて返信する形とした。

④支援者：参加者の反応を踏まえたプログラム実施後の評価についての振り返りについて、許可を得てフィールドノートに記載した。

(2) 全プログラム終了後の反応

①母親：子どもの言動や態度の変化、母親の言動や態度の変化、母子関係の変化、プログラムの効果や課題、今後の展望について、フォーカ

ス・グループインタビューを行った。

②支援者：プログラムを通じた、子どもの言動や態度、母親の言動や態度、母子関係等の変化について、プログラムの内容の課題と今後の展望についてフォーカス・グループインタビューを行った。

インタビューは、プライバシーの守られる場所で実施し、研究参加者の同意がとれた場合にはICレコーダーに録音した。

7) 分析方法

インタビューデータは、データ収集後、逐語録を作成した。逐語録と質問紙の自由記載の記述を繰り返し読み、DV被害女性のDV被害に対する認識や育児に関する現状や困難感及びニーズに関連する語りを意味のまとまり毎に文章を切り取る。その上で、前後の文脈から意味を解釈し、意味にあったコード名を付与し、類似性と相違点とを比較検討しながら分類し、類似した内容のコードのまとまりをサブカテゴリとした。さらに、カテゴリ間の関係から一つのコアカテゴリを選定し、それを中心にカテゴリの関係性を統合した。

分析にあたっては、研究者間で内容を吟味し、分類の妥当性を確保する。分析結果は参加者に公表し、参加者からの意見を聴取し、記述した内容を修正することで信頼性を高めた。さらに、適宜質的研究者のスーパーバイズを受けた。

6. 倫理的配慮

研究協力者に対して研究の趣旨や方法を口頭及び文書で説明し、研究協力者の権利に関すること、研究協力は自由意志であり、いつでも中断や取り消しができること、守秘性を厳守すること等を保障した。金沢大学医学倫理委員会の承認(642-1)を得た後に開始した。

【結果】

1. 研究参加者の概要

研究参加者は、母親 13 名、子ども 21 名であり、実際にプログラムに参加した子どもは 16 名であり、男児 11 名、女児 4 名であった。母親 1 人当たりの子どもの人数は平均 1.6 人であり、子ども 1 人は 6 名、子ども 2 人は 6 名、子ども 3 人は 1 名であった。母親の平均年齢は 37.5 歳 (30 歳代前半～40 歳代後半)、現在職業を持っている母親は 8 名 (72.7%)、学生 2 名 (18.2%)、無職は 1 名 (9.1%) であり、2 名は不明であった。別居後平均 3.7 年 (6 か月～7 年) であった。プログラムに参加した子どもの年齢は平均 6.8 歳 (5 歳～11 歳) であった。

全 6 回のプログラムへの平均参加回数は母親 1 名につき 2.8 回であった。5 回参加は 2 名、4 回は 5 名、2 回は 2 名、1 回は 4 名であり、全 6 回続けて参加した人はいなかった。欠席理由としては、母親の仕事や学業、子どもの学校行時や稽古事、母親もしくは子どもの体調不良であった。各回の参加人数は表 2 に記す。

表 2. 各プログラムの参加状況

		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
プログラム	母親	5	4	8	4	8	8
参加者	子ども	7	5	11	5	11	11
	参加率 (%)	38.5	30.8	61.5	30.8	61.5	61.5

2. 今回のプログラム前の参加者の子どもとの日常生活の状況: 子どもとの関係性で難しいこと、子どもの特性で難しいこと、必要な支援

研究参加者 5 名であり、30 代 4 名、40 代 1 名であった。〈〉カテゴリー、[] サブカテゴリーとして記す。

子育てに関して不安や困難を感じている事柄について 6 カテゴリーが抽出された。〈公的制度が上手く使えない等経済的に不安定な状況への不安〉、〈もし母親が今死んでしまった

ら、子どもがどうになってしまうのか心配〉、〈面会交流で夫に子どもを合わせるとことへの不安と割り切り〉、〈子どもの落ち着きがない等の DV の影響への心配〉、〈男児に今後どのように関わったらよいかわからない〉といった生活や子どもの不安や心配の意見が聞かれた。その一方で〈地域で母子が支えられながらの生活環境への安心感〉という声もあった。

両親との関係も芳しくなく、支援が得られないことにより、母親自身が病気になった場合に、残された子どもはどうなるのか等、経済的な不安が募る故により大きな不安も感じていた。

私、親から相続するものもないし、私この先どうなるのかな、あの子この先どうなるのかな、学校に行かせてあげれないと困る (I さん)

また、母子家庭の場合、公的な制度が使える場合と、親との同居によっては受けられる支援に制限が出るなど、ギリギリの経済状況で苦悩している様子が聞かれた。

DV による子どもへの影響として、大人の顔色を見ることや落ち着きがないことが子どもの特徴として挙げられたが、別居後、子どもが安定していると言う発言も聞かれた。さらに、夫と別居したことで、男児を育てている母親は、子どもに関わる男性の役割が不足しており、例えば銭湯に行けないことや、思春期になった時の男児への対応が分からないと言った発言も聞かれた。

一方で、〈地域で母子が支えられながらの生活環境への安心感〉といった、住み慣れた環境で地域の人に支えられていると感じられる環境による安心を感じている母親もいた。

私も引越した先が恵まれていているんなりに支えられているけど、もしもどこかで始終子ど

も（と自分）だけで暮らしていたら、絶対気が狂う。そんな時に元夫のことで何かあったりすると心も病むしよけいだめになると思う。（Aさん）

必要な母子プログラムや支援内容については、＜母子家庭という同じ状況での、母親同士、子ども同士交流の場が欲しい＞の1カテゴリーが抽出された。

どこかしらでうちは母子家庭だから、お母さんしかいないからみたいな気持ちが本人の中にある、ここは楽しいんだと思う。母子家庭でもいいんだと多分子どもが思っている。そうして子どもが楽しめるのであればと思って今回は来ました。（Cさん）

3. 各回のプログラム内容とプログラム実施終及び帰宅後の母親及び子どもの反応

1) DV 被害支援者の視点から考えるプログラムとポイント（表4）

本プログラムは、第1回、第2回、第5回、第6回は母子一緒プログラム（母子が一緒に行うプログラム）を行い、第3回、第4回は母子別プログラム（母子が別々に同様の内容を行う）を行った。

母子一緒プログラムも、母子別プログラムも、各回の流れは、①参加者の自己紹介とアイスブレイク、②テーマのワークを行い、③ワーク終了後は、母子共にそれぞれワークでの気持ちを発散したり、リラックスするために、母親はお茶会、子どもはおやつを食べた後、外の公園に遊びに行き、身体を動かした（表3）。

プログラム内容は、DV 被害者支援の経験に基づき、テーマに沿って修正検討を重ねた。各プログラムの詳細の内容に関する注意点は表4に記載した。各回必ず事前に確認した点は、ここはお父さんと一緒に住んでいない人が集まっていること、無理に話をする必要はないこ

と、いつでもやすめることを説明すること、プログラム中は母子の様子を丁寧に見守ることであった。特に、お父さんと一緒に住んでいない人が集まっていると言うことを繰り返し伝え、子ども同士が同じ境遇であること感じ、普段、言えない感情を仲間の中で語ることにつながる効果があるのではないかと思い強調した。また、発達障害の診断を受けている子どもが居たり、DV 被害を受け心身に様々な傷を負っている子どもが集まってきているため、事前に子どもの特徴の確認（例えば、多動や対人恐怖症、不登校、目が合わない、母親の心身の状況、家族背景等）を行い全員で認識を確認した。

表3. プログラムの流れ

時間	母子一緒	母と子ども別々の部屋でのプログラム	
		母プログラム	子どもプログラム
	第1回、2回、5回、6回	第3回、4回	
20分	お約束 参加者自己紹介 アイスブレイク	参加者自己紹介 自己紹介の中で、近況報告	お約束 参加者自己紹介 アイスブレイク
1時間	親子ワーク	講義&ディスカッション	ワーク
1時間	母:お茶会、子ども:外遊び	お茶会:お茶をしながら話をする	外遊び

2) 母親のプログラム実施終了時反応（表5）

母親のプログラム実施終了時の反応としては、「子どもの気持ちに気づかずに過ごしていることに気付いた」や「怒っているのは感情だけで、叱るではなかった。怒鳴る必要はない」との気づきや、「子どもとの関係を見直す機会になった」といった子どもとの関係に目を向けた発言が聞かれた。また、全プログラムにおいて、母親同士が語れる場を設けており「参加者同士、共感しあえて力をもらえた」等、同じ経験をしている人がおり、私だけの経験ではないといった気づきの場にもなっていた。発言も聞かれ、「否定されず安心できる場」等“安心”という言葉が多くの母親から聞かれた。さらに、「自分の中で肯定感が低かった事等考え直すのに良い機会になった」や「振り返りもう一度

整理するために役立つ」等、自分の経験と自分自身を客観視し、気持ちを整理することに繋がっているようであった。

3) 子どものプログラム実施終了後の反応

子どもの反応としては、「楽しい、友達がいっぱいいるから (G1)」と友達と一緒に遊べることは楽しい、嬉しいと表現していた。父親とこのことを尋ねると、「離婚したこと悲しい気持ち。ママはパパを恐がっていた。俺らは恐くなかった。なぜ別れたのか、納得はしたけど悲しい (G1)」や「今はお父さんがお母さんに嫌なことを言わなくて安心だ。でも、お父さんに会いたい时会えないのが悲しい (H2)」と父親と別居したことへの思いを語った子どももいた。その一方で「お父さんが居なくて嬉しい。お父さんは怒るから (D1)」や「お父さんと別々に暮らして良かったことはいっぱいある。例えば恐くなくなった (L1)」と語った子どももいた。さらに、第3回、第4回の家族や暴力についてのテーマの際には「怖い。お父さんが、お母さんに夜怒っているのを思い出した (G1)」、「寝ている時お父さんがお母さんに怖い言葉で怒鳴っていた。そんなことしなかったらいいのと思っていた (H2)」、「お父さんのこと覚えている。話すのは嫌。もっと思い出すから (A2)」と父親との同居中のことを思い出しその時の気持ちを語った子どももいた。

また、「引っ越しして友達と会えないことが困っている (H2)」と語った子どももいた。

4) プログラム1～2週間後の母子の様子(表5)

プログラム実施後1～2週間の子どもの変化については、各回毎に異なっており、長期的な変化は測っておらずわからなかった。但し第4回から「パパとはなんなのか?と聞いてくる」

や「兄と喧嘩した時、手を出すのをやめ『あー腹が立つ』と言っていた」といった反応の報告があった。さらに、第6回のプログラムで、お互いの良い所をいうという親子でのワークを行った後、母親から、子どもが「『いつも美味しいご飯をありがとう』と言ってくれた」、「家事のお手伝いを進んで手伝ってくれた」といった報告もあった。

第3回、第4回の母親と子どもが別々のプログラムを実施した後には母親より「DVの絵本を見た子どもがどんな反応をするのか不安な気持ち」といった子どもの反応が気になるという報告が多数聞かれた。しかし、子どもの笑顔だったり、普段と変わらない様子に、その不安は消失しているようであった。

父親に関する内容では、G1(子ども)さんが、父親と離れて暮らしていることに納得していないことや悲しいと言う思いがあることを、母親であるGさんに伝えると、「子どもが父親について悪い記憶を忘れてくれたら良いと思います(説明していた内容が)、まさか、こんなところでしわ寄せとしてくるのかと少しショックを受けました。でも今回のお蔭で息子の胸の内を知ることができたのは、逆に良かったと思います、今後の対応を考えるきっかけになりました (G)」とDVによる離婚を子どもにどう伝えたらよいかという課題も浮き彫りになった。

4. 全プログラム終了後の子どもや母親、母子関係の変化、プログラムの効果や課題

1) 母親

全プログラム終了後、プログラムに参加した母親8名が子どもや自分自身、母子関係の変化やプログラムの効果について語った内容において、7つのカテゴリーが抽出された。<>カ

テゴリーとする。

母親から「手に負えない子なんですけど、何だかんだ言って人の話をちゃんと聞いて。自分の感情表現を一切できない子だったけどちょっと口に（できるようになってきた）無視じゃなくて言えるようにやっとなってきたかな」と＜母子間の言葉によるキャッチボールの向上＞や、＜母親が子どもへの接し方を学んだ＞ことにより、母子のコミュニケーション能力が相互に向上したという変化が聞かれた。

また、「お父さんがいない子たちの中で、周りが（気持ちを）言ってくれることで自分の代弁者みたいな、アドボケイトしてもらっている感じがあって、彼ら（子ども）の違う意味での安心がここで得られているのではないかなって思いました（A）」というように、同じ境遇であることによる安心といった＜自分を認めてくれる場や仲間への安心感によって引き出される参加意欲＞も母親から聞かれた。

その一方で、＜成長は感じられない＞ことや、＜子どもがプログラムの内容を話さない＞、＜プログラムへの参加拒否への対応の困難＞という声も聞かれた。さらに、自分の気持ちは言うようになったが、＜相手の話を聞くと言う次のプログラムの必要性＞も聞かれた。

2) 支援者

全プログラム終了後、プログラム内容の検討実施を行った支援者 4 名へプログラム後の母子の変化やプログラムの効果、課題についてフォーカス・グループインタビューを行った。その結果、10 のカテゴリーが抽出された。＜>カテゴリーとする。

プログラムの効果として＜子どもや母親、その母子関係が落ち着く＞、＜母子（別）並行プ

ログラムの効果＞、＜母子一緒プログラムの効果＞が聞かれた。プログラム実施の工夫としては、＜子どもや母親との信頼関係を築く＞、＜安全を感じられる場への配慮＞、＜プログラム内容の工夫＞が聞かれた。さらに、プログラムの検討課題として、＜子ども同士のつながりを作る工夫＞、＜母子一緒と別々のプログラムのバランス＞、＜開催回数と時期のバランス＞、今回は母子のコミュニケーションを促進する目的もあったため、お母さんと話をしてみてくださいとあえて言ってもよかったといった＜子どもプログラムにおける守秘は不要＞が聞かれた。

【考察】

1) 子どもを抱えている DV 被害女性のニーズ

本研究の調査において、DV 被害を受けた母親は孤立している場合が多く、回りに支援者がいないことから、助けてくれる人の存在や地域を求める声が聞かれた。また、DV 被害を受けると夫からの追跡を避けるために、見知らぬ環境での母子を強いられる状況が多いが、子どもも母親自身も住み慣れた環境での生活を望んでいた。DV 被害とうつ病の関連⁴⁾や加害者と離れた後も身体や精神の症状が続いているという報告がある⁵⁾。このような状況では DV 被害者はより無力化され孤立しやすい。さらに、加害者から逃げ見知らぬ土地で生活を再建することは、母子をより孤立させ、回復を遅くする可能性がある。地域社会において孤立せず安心安全を感じられる場や支援が必要である。

経済的な不安も多く聞かれた。母子家庭の貧困は日本においても問題となっている。経済的困窮のため実家等の支援を得る工夫をしても、それがあだとなり支援を求められず、結局ギリ

ギリ⁶⁾の生活若しくは困窮した生活になることも現行では考えられる。公的制度が本当に母子家庭にとって適切であるのか再度見直す必要がある。

さらに、DVに関連した不安や相談があっても、なかなか気軽に相談できないという声も聞かれた。日本は母子家庭に偏見もあることから、子どもも潜在的にそれを感じとり、なかなか自分の置かれている状況を他の友人に話すことは難しいと考えられる。よって、同じ状況の同じ年齢の子ども同士で、自分の親の事や家庭のことを話す機会を作ることが、母親や子どもに大切重要であると考えられる。

2) 母子回復プログラムの効果

母親からは参加者や支援者から共感してもらえ、力をもらえた、私一人ではないと気づく場になったことが明らかになった。DVという自分と同じ状況を経た女性の経験を聞くことで、自分自身を客観視し、気持ちを整理することにつながったのではないかと考えられる。また、仲間を感じることで、自分が受け入れられた経験により、エンパワメントされ、回復が促されることにつながったのではないかと考えられる。

DV被害母子の回復において、安全安心はとても重要である。各々の参加者がトラウマを抱えている場合が多く、他者の言動からフラッシュバックを起し、プログラムへの参加が難しくなることも考えられる。また、DVにさらされる子どもへの影響としても、子どもの問題行動、多動、不安、学習困難などの比率が著しく高いという報告もある⁶⁾。参加者の背景を知り、環境への細やかな対応をすることで参加者の安全や安心を守ることが必要である。

DV被害者の母子は、父親との関係や子育ての困難感などがあるが、今回、母親と子どもの安心できる場と信頼できる人といった環境の提供を行うことで、母子の良好な関係の再構築を促し、同時に、子どもへの適切な養育環境を提供できていたことが明らかになった。安全安心は、DV被害からの回復に重要な要素であり、このことが、母親と子どもを安定・安心に導き、母子の相互作用により、より良好な母子関係の再形成を促進することにつながったと考えられる。

3) 今後の展望

母子の回復には、まずは母親自身が癒され、子どもが大切にされる場が必要であると考えられる。これは、プログラムへの参加が連続してなくても、知っている顔がいつもそこに行けば居るといった環境を用意することにより、人とつながっている感覚を継続させることができると考えられる。

DV被害を受け加害者と離れた場合、加害者は子どもの父親でもあり、別居や離婚の事実を子どもに伝えることに困難を感じている母親もいた。このように、DV被害を受けた者が集まり相談できる場となるようなプログラムの在り方や、必要時子どもと母親との架け橋をするようなプログラムの内容を含無ことを検討することも望まれる。

さらなる研究を重ね、より実践可能なDV被害を受けた母子の早期回復およびDV予防プログラムについて検討していく必要がある。

4) 限界と課題

子どもの年齢が様々であり、今回の子どもの反応がプログラムの効果なのか年齢が上がったことによることなのかは不明である。今後、

年齢別によるプログラムを実施し、より精練し内容を検討していく必要がある。

文献

- 1) 最高裁判所事務総局(2001), 司法統計年報
- 2) McKinney AM1, Thompson LR, Truwit CL, Velders S, Karagulle A, Kiragu (2008). Unilateral hypoxic-ischemic injury in young children from abusive head trauma, lacking craniocervical vascular dissection or cord injury, *Pediatr Radiol*, 38(2) pp64-74.
- 3) Peter H. T, Mark W. L., Howard E .F., (2004) /大島巖, 平岡公一, 森俊夫他(監訳)(2010), プログラム評価の理論と方法 システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド, 第1版, 日本評論社, 東京. p17.

- 4) 片岡弥恵子, 八重ゆかり, 江藤宏美他(2005), 妊娠期におけるドメスティック・バイオレンス, *日本公衆衛生誌*, 52(9), 785-795.
- 5) いくの学園(2009), DV被害当事者の自律支援に関する調査報告書「482人の声を聞きました」
- 6) Gleason WJ.(1995), Children of battered women: developmental delays and behavioral dysfunction. *Violence Vict*, 10(2), 153-60.
- 7) Judith Lewis Herman(1992)/中井久夫(2005), 心的外傷と回復(増補版), みすず書房.

表4. 各回のプログラムの目標と検討ポイント

開催回	各回の目標	各回のプログラム内容の検討ポイント
第1回 7月 (1泊2日) 第2回 (9月)	【いろんな気持ちを言葉で伝えよう-コミュニケーション、怒りの感情について-】 ・色々な感情を表す言葉を知る ・自分の感情を「わたしの気持ち」として表現する ・怒りの感情について、感情と行動は別であることを伝える	今まで暴力の中で抑圧された生活をしてきた母子は、各々感情を押し殺している可能性が高く、自分の感情について気づけるようになる。 (第1回欠席者の多く、再度同じテーマと目標で繰り返して行う) 人形劇: ペーパーサート実施時 ●怒りを伝える側の注意 ・メッセージで伝える。 ・子どもが理解しやすいように、日常の場面で起こりやすい”怒りの場面”にする。 ●怒りを受ける側の注意 ・怒りは自分の感情であり、相手の責任で引き起こされたのではないこと、怒りをぶつけることは相手を攻撃することであり、自分の怒りをますます激化することを教える。
第3回 10月	【家族について話そう】 ・多様な家族形態があることを知る。 ・色んな家族があってよいと思えるようになる。 ・男女の性別役割を考え直し、思い込みに気づく。 ・暴力をふるう側に責任があり、暴力を振るわれた側には責任はないことを知る。 ・お互いが尊重しあうことを知る。	家族に関する話は大変慎重をきす。よって下記に特に注意を払う。 ●DVの家庭で育ったことにより、自然と身に着いた考えを、新たに気づけるような問いかけをする。 ●性的役割分業や、家の中での様子が当たり前と持っている意識の変化を狙う。 ・ママがご飯を作ることが当たり前であることや、パパ=怒る、というのが当たり前であることは違うのだと気づけるように、違う方法もあることを具体的に伝える。 例) ママが口答えするからパパが怒ると思っていた。 ママが文句をいうから悪いと思っていた ⇒これを変える必要がある。 ●クールダウンが大切
第4回 11月	【安全計画を立てよう-勝たなくていい、ひきわけあり、困った時はどうする?-】 ・自分を守ること、守ってもいいことを学ぶ ・問題があった時に、役立つ解決方法を学ぶ ・いじめられる子に責任はないことを知る。 ・友達とのコミュニケーション(1メッセージのモデルを示す)	・ここはお父さんと一緒に住んでいない人が集まっていることを強調する。 ・お父さんとお母さんが別れたことは、あなたのせいではないことを説明する。 ・気持ちを表出することを一つの目的としており、お父さんが暴力を振るっている時の気持ちを表出できるように、まずは紙芝居のA子ちゃんに気持ちを尋ね、話をする場面を作る。 ・色々な気持ちがあってよいこと。 辛い気持ちも怖い気持ちも、怒りも、感情に良い悪いはなく、大切に大人に話せることが伝わるように
第5回 12月	【クリスマス会: 親子でボディワーク】 ・母子での触れ合いを通して、ぬくもりを感じる ・母子でのコミュニケーションが今までよりも円滑になる	●子どもへの接し方のモデル、母モデルがない⇒コミュニケーションモデルを他の人を参照し何気に見せる。 下記の点を意識してプログラム内容を組み立てる ・親子の触れ合いを大切に作る。 ・親が子と一生懸命遊ぶ機会を作る ・他の親やスタッフが子どもと遊んでいる様子を見てまねる機会を作る。
第6回 2月	【自尊感情を高めるワーク-だいじなわたし-】 ・自分が世界でたった一人の大事な存在であることを感じる。 ・肯定的メッセージのシャワーを浴びる。 ・自尊感情が向上する	●自己尊重について幼児、低学年では理解しにくく、他人のいいところもまだ面識浅く関係性ができていないことから、まず「自分」について考えられるような内容にする。 ・「権利」についての説明をする。 ・紙芝居の後には、子どもに訊いて考えさせる時間をとる。

表 5. 各回のプログラム実施終了時と 1~2 週間後の母子の様子

		プログラム実施終了時			プログラム実施後1~2週間の様子				
		印象に残っている内容と気持ち	子どもとの関係で役立つ事	場に関する思い	子どもとの話の有無と内容	その時の母の気持ち	その時の子どもの様子	子どもの変化の有無と内容(有/無)	その他の気づき
第1回	母子	皆の話を聞いていて一人ではないと思っ たし、話したこと共感してく れて嬉しかった。人とつなが ることを大切にしたいと思いま した。(J)	・また一つ共同 の思い出を通 して会話もで き、子どもの世 界も親の世界 も広がりが外へ 気持ちに向く パワーをもらい ました(H)。	・色んな所の 力が”ふ”つと 抜けた時間と なりました(H)	あり:3名 なし:1名 絵日記を描き ながらお友達 のことが出て きました。(J)	・行か迷った けれど行って よかったと思 いました。普段 のことを忘れ ほっとしまし た(J)。	・言いたいこと がたくさんあ ったようで、体 全部を動かして 一緒に住んで いる祖父母、 おじに興奮気 味に伝えてい ました。(H)	(0名/4名) ・上手に要望を 言葉にして伝 えてくれるよ うになりました (D)	・父親について も息子の胸の 内を知ることが できたのは、 逆に良かった と思ひ、今後 の対応を考え るきっかけに なりました。 (G)
第2回	母子	・気持ちのシ ートで気持ち の言葉を選ぶ こと…最近色 々な気持ちの 言葉を忘れて いるなあ、プ ラスの言葉を使 いたいと感じ ました。(C)	・お母さんと子 ども劇の様に、 子どもの気持 ちを気づかず に過ごしてい ることに気づ いた(C)	・初めてなの ですが、温かく迎 えていただき ほっとしまし た。子どもも すぐになじん でいました。(F)	あり:0名 なし:4名 ・「おれ、つま んないって書 いちゃった」と 後悔してい る素振りでした (F)	5歳にはまだ難 しいかとも思 いましたが、ど んなふうと言 えば自分の本 当の気持ちを 伝えられるの か、考えるき っかけにな った(F)	・鬼ごっこが 楽しかったよ うで、一生懸命 話してくれま した(F)	(2名/2名) ・子どもがお 母さんはどん な気持ち？と 母親の気持ち を知りたいが ら(C)	・Gを見て話を 聞いてやって なかったな… と気づきまし た。(A)
第3回	別	・どの方のお話 もとても共感 できるように 感じた。当時 のことを少し 客観的に振り返 ることができる ようになって いる自分に 気づいた。(E)	・振り返り、自 分の中で自己 肯定感が低 かったこと等 考え直すのに 良い機会に なった(C)	・当時受け入 れていなかった 現実をやっと 消化できた(A) ・否定されず 安心できる場 合(C) ・同じような目 にあった人た ちが、こんな にいるんだと 分かった場 合。今の自分 を認識でき ました。(L)	あり:7名 なし:0名 ・昨日、今日 はどんな話を した？と聞き ました(C) ・子どもが見 た絵本をどう 思ったかにつ いてです(I)	・いつもプロ グラムの内容 を聞いても「ひ みつ」と言っ ても教えてく れない(E)。 ・DVの絵本を 見た子どもが どんな反応を するのか、過 去を思い出 すのか不安な 気持ち(G)	・聞かれるの は嫌がってい る様子(C) ・「ママを怒 って叩いたり して悪い！」 と怒りつつ 「怖かった」と 不安になっ てみたり。 (G)	(2名/5名) ・私の膝に座 りたがった。思 い通りになら ないとき、暴 力をふるうぞ ！と母親に 言ってきた。 暴力は悪い という認識が 得られたのだ と感じた(C) ・弟と妹に少 し八つ当たり しているよう に見えた(D)	・A(子ども)は いつもニコニコ していて、辛 い時も我慢し ていることが あります。き ちんと聞けば 話してくれ るので、ここ にこしてい ても、その都 度聞くことを 心掛けたい と思いました。 (L)
第4回 11月	別	・アサーティブ なコミュニケーション、みんな 難しさを感じ ること…簡単 じゃないよな ~(F)	・感情でのみ 接して伝えて いた。気持ちを 伝えきれない ので、しか る時にメッ セージなど 伝えようと思 う(A)	・怒っている のは感情だけ で、叱るでは なかった。怒 鳴る必要は ない(A)	あり:2名 なし:1名 ・帰りの電車 で「絵をぐちゃ ぐちゃ書いた 」と言っていた。 何で？と聞くと 「よくわから んかたから」と (F)	・内容を理解 できなかつた のか、子ども が自分の気持 ちを整理でき なかつたのか (F)	・ちょっと落 着かないよう な様子でした (F)	(3名/0名) ・パパとはなん なのか？と聞 いてくる(A) ・兄と喧嘩し た時、手を出 すのをやめ「あ ー腹が立つ！」 と大きな声で 言っていた(F)	・「お母ちゃま 大好きー」と 沢山言ってく れるようになった (F)
第5回	母子	・ちょっと悩 んでいたこと を吐き出して 共感があり「頑 張る」力にな りました(H)	・振り返り、も う一度整理す るために役立 つ(C)	・一番大変だ った時のこと を思い出した が、参加者同 士、共感あ えて力をもら えた場だ った(E)	あり:4名 なし:0名 ・クリスマス 会楽しかった (C)3名	・子どもの笑 顔を見て自分 も嬉しかった (H) ・温かい気持 ち(M)	・満面の笑 み(H) ・楽しそう (M)	(0名/4名) ・クリスマス 会で、年齢問 わずたくさん の人に会って 喜んでいま した。(C)	・一人の親と 子で周りを 気にせず 楽しめまし た。(C)
第6回	母子	・子どもの良 い所を挙げて いったが、「 ~を頑張 っている」と いう項目が多 かった…気づ かぬうちに 頑張らせて すぎたことに 気づいた(E)	・なかなか、 面と向かって 話すことが少 ないので(話 題として)良 い機会でした (F)	・安心できる 場シングルを 隔さなくても よい(C) ・子どもとの 関係を見直す 機会になった (E)	あり:3名 なし:2名 ・またシン ママに行き たい？(C)	・行きたい と言っ てほしい なあ。(C)	・すぐには返 事せず無言 でしたが、し ばらくする と「ちょっと だけおもしろ いのがあ った」と答 えてくれた (D)	(3名/2名) ・母のことを 大好きとい う(A) ・「いつもお いしょさん ありがとう」 や「いつも 学童に迎 えに来てく れありがとう と。(B)	・全体を通し て、離 室せず、も ぞもぞして はいるが、 プログラム に参加す るようになった (A) ・家事のお 手伝いを進 んで手 伝ってく れた。(B)